

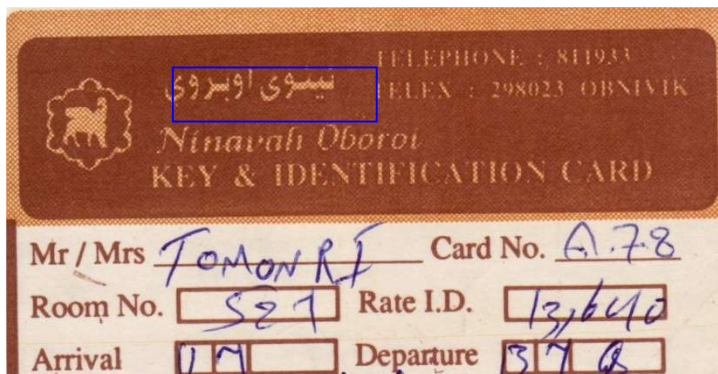
ムチ打ち刑を乗り越え BC8 世紀歴史ロマン聖書ヨナ書を訪ねて

岩本友則

仕事は、朝 7 時から夜 9 時、10 時と毎日くたくたになるほどの仕事でしたが、ある時、私たちはイラク北部第一の都市（バグダッドから北へ約 400km）である「モスル」と言う町近郊を、集中的に査察をすることになりました。通常モスルへは、ヘリコプターで行くのですが、車により泊まり込みで行くことになりました。

1. ホテルの宿泊カードを見て体中に電気が

バグダッドからの道中、幾つかの施設を査察しながらモスルに来ました。夕方ホテルに入り、下記の宿泊カードの「Ninavah」見て、体中に電気が走ったのです。ここがイラクでなければ、何も感じなかったでしょう。もしやと思い聞いてみました。「Ninavah」とは旧約聖書ヨナ書のニネベですか？ と聞きますと事も無げに「そうです。そのニネベで、ホテル名もそこからネーミングし



ています。」と返ってくるではありませんか！ 更に、ニネベの城壁や門が発掘・修復され、見る事が出来ると言うのです。

また、城壁のそばにイスラム教の寺院があり、ヨナのミイラが祭られていると言うのです。

ここモスルは、紛れもなく旧約聖書ヨナ書の舞台となったニネベの町なのです。また、ヨナ書は、映画「ピノキオ」のピノキオやゼベットじいさん達が鯨の腹に呑み込まれてしまう元ネタが、実はヨナ書だからです

2. 預言者ヨナに対する神の命令・降りかかる災い

今から約 2800 年前の昔、預言者ヨナは、神様から 1 つの命令を受けます。それは、墮落した大きな町ニネベに行って、神の教えを説き悪の道から人々を正しい道に立ち返らせることです。ヨナは、神様の命令に背きニネベに行くことを拒み、全く反対の地中海の外れタルシュシュ（現在のスペイン）に行こうと船に乗ります。航海の途中激しい嵐に遭遇します。船員達は、誰かが罪を犯し、その罰としてこの災いが降りかかっているのだと考えます。そして、彼らは、誰のせいで、このわざわいが、自分たちに降りかかったのか知ろうとし、くじを引きます。そのくじはヨナに当たります。それで、その災いから逃れるためにヨナの指示に従ってヨナを海に投げ込み、嵐がおさまるのです。

海に投げ込まれたヨナは、どうなったのでしょうか？ 神様は、大きな魚を用意されヨナを飲み込ませるのです。魚に飲み込まれたヨナは、魚の餌になることなく三日三晩魚のお腹の中で過ごすこととなります。魚の中で悔い改め反省したヨナに対し神様は、魚に命じ陸地に吐き出させるのです。陸地に吐き出されたヨナは、ニネベに行くのです。多くの人々は、こうした聖書の記述からヨナは、歴史上の人物ではないと言います。

2018 年 11 月インド洋に浮かぶアンダマン諸島の北センチネタル島で未開の民族に宣教のた

め上陸を試みたアメリカ人宣教師の殺害が報道されました。神の命令とは言え、宣教は、いつの時代も命がけです。預言者ヨナがタルシュシュに逃げる気持ちよく理解できます。

3. 預言者ヨナの足跡を訪ねて

この時期、真夏であった事からイラクでは、午後の暑さを避けて昼寝するため午後2時頃には、工場は閉まり人々は仕事をしません。ですから査察も、それまでに終わらなければなりません。こうしたイラクの習慣は、私のニネベ観光に幸いしたのです。今日は、査察を早く終わってニネベ観光と、朝から一人興奮し査察どころではありません。

ニネベ遺跡は、長さ 12 km の巨大な台形の壁で囲まれ、北から南に縦に伸びています。岩盤の土台の上にレンガで建てられました。外側の正面と巨大なバットレスと呼ばれる補強壁は石で作られていました。ニネベを囲む城壁には 15 の門があり、一部の門の中には、巨大な半人間と半動物の姿の像が待ち構えていました。これ



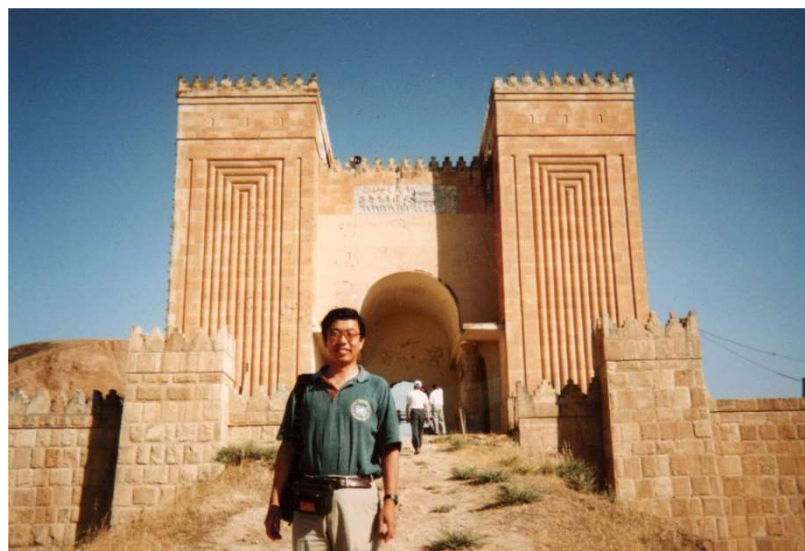
発掘された城壁の一部

らの門や城壁は、遺跡管理省によって大幅に修復されたと書いてありました。15 の門の内、修復及び修復中の門としてシャマシュ門、アダッド門、ネルガル門、マスクゲート門がありました。

下の写真は、発掘され、修復されたニネベの町に入る門です。今から約 2800 年前の昔、預言者ヨナは、大きな魚から吐き出された後、神様の命令に従ってこのニネベの町に来たのです。そして、この門を通過してニネベの町に入って、この大きな街を歩き巡り神様の言葉を伝えたのです。聖

書は、その有様を以下のように伝えています。

「ヨナは、主のことばのとおり
に、立ってニネベに行った。ニネベ
は、行き巡るのに三日かかるほどの
非常に大きな町であった。ヨナ
は初め、その町にはいると、一日中
歩き回って叫び、「もう四十日する
と、ニネベは滅ぼされる。」と言っ
た。そこで、ニネベの人々は神を
信じ、断食を呼びかけ、身分の高い
者から低い者まで荒布を着た。こ



のことがニネベの王の耳にはいると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中にすわった。」

「神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。」

ヨナの働きによりニネベの人々は悔い改め、こうしてソドムとゴモラの危機を脱することが出

来たのです。しかし、ヨナは、ニネベの人々の悔い改め、神様の対応がおもしろくありません。聖書は、その様子を次のように記述しています。

ヨナは、神様に言うのです。「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです。」

「ヨナは町から出て、町の東のほうにすわり、そこに自分で仮小屋を作り、・・・その陰の下にすわっていた。

「神である主は一本のとうごま」備え、それをヨナの上をおおうように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナのなきげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを、非常に喜んだ。」

私は、行き巡るのに三日もかかるニネベの町は、どれくらい大きかったのだろうか？ ヨナが小屋を作り唐胡麻（とうごま）が生えた所は、何処だったのだろうか？ 修復された門をくぐり城壁の高台に登り町の跡を眺め想像してみるのです。こうして、とても心高まる一時を過ごしたのです。

聖書では、更にヨナついて、

「しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」」

「すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」」

「主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」



唐胡麻（とうごま）は、小石川植物園で見ることが出来ます。11月が実を付ける時期です。

4. ヨナのみイラとの対面（ムチ打ちの刑を乗り越えて）

ヨナ書は、「とうごま」の出来事で終わっており、その後のヨナに関する記述は、聖書にはありません。私は、ニネベにおいて神様からの役目を果たしたヨナは、その後ユダヤに帰って生涯を閉じたと思っていました。ところが、ここモスルのイスラム教の寺院にヨナが安置されているというのです。これは対面する必要があります。しかし、ここで大きな問題が、私たちの前に立ちはだかるのです。それは、「イスラム教徒でもなく、しかもアラブ人でもない人の入場は禁止されているから、入っては行けない。もし分かったら捕まってムチで打たれる。」と私たちに同行した通訳の人が言うのです。この言葉に、皆は入場することを止めると言うのです。

英国人のチーフは、入らない。アルゼンチンから来ている査察官は、この任務を最後にアルゼン

チンに帰ることになっているので危険は犯さない。結局、11名の査察チームの中で、入ることにしたのは、私とオーストリア人のマルチンの2人だけになったのです。国連関係者は単独行動が禁止されている中、私とマルチンは1人にならなかったことを喜び、同僚の制止を振り切って、その寺院に足を踏み入れたのです。

しかし、寺院に入って見たもののどうやってヨナの安置されている場所に行くのか全く分かりません。アラビア語を二人とも読むことが出来ません。戸惑っている私たちに、手招きする人物がいるのです。

(右の写真の人物です) 彼が、話していることが分かりません。私たちも、英語、ドイツ語、仏語、日本語で話しかけてみましたが、全く会話が出来ません。彼は、それでも私たちを手招きし、ついて来いと言っているようでした。私たちは、彼について行くことにしました。

彼の後について、彼のするとおり靴を脱ぎ、更に寺院の奥に入ると長蛇の巡礼者の列があるではありませんか、この巡礼者の列に加わって、進んでいくと綺麗に飾られ祭りに使われる御輿のような物の中に

納められたヨナのミイラ (ミイラと言うより遺骨と言った方が正しいかも知れませんが) 暗くてよく見えないのです。) に対面出来たのです。

幸いにして、私たちは、捕まってムチで打たれることなく無事にこの

寺院から出てくる事が出来ました。そんな私たちを、入場しなかった同僚達は、あきれ顔で1時間近く待っていてくれたのです。左下の写真が、ヨナの祭られていたイスラム教の寺院です

ヨナは、そのままニネベにとどまったのでしょうか？ 本当にヨナなのでしょうか？ 確かに、

旧約聖書は、イスラム教の聖典の一つですから、イスラム教の寺院にヨナが祭られていたとしてもおかしくはありません。

ムチ打ちの刑の恐怖を乗り越えてヨナのミイラに対面したのですが、後で冷静に考えてみると、それは、偽物である確立が高いのです。なぜならばヨナは、BC760年頃の人物で、イスラム教がムハンマド (マホメット) によって確立されたのは、AD630頃であり、1400年もの間、どうなっていたか疑問です。また、争いが頻繁に起こった地方であり、保存は困難でしょう。しかし、もしかすれば本物かも、という期待感があります。

ニネベは、ヨナの活躍により滅ぼされることなく、今日モスルとして存在しています。今、私たちが住んでいるこの時代は、もしかすると、神様が滅ぼそうと思われたニネベの町の荒廃した姿よりも酷いかも知れないと思うのです。ヨナ書の終わりには

「・・・惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」と記されています。

イラク戦争後、アルカイダに占拠されたモスル、多分ニネベの遺跡も破壊されてしまったのでしょうか？

続く

